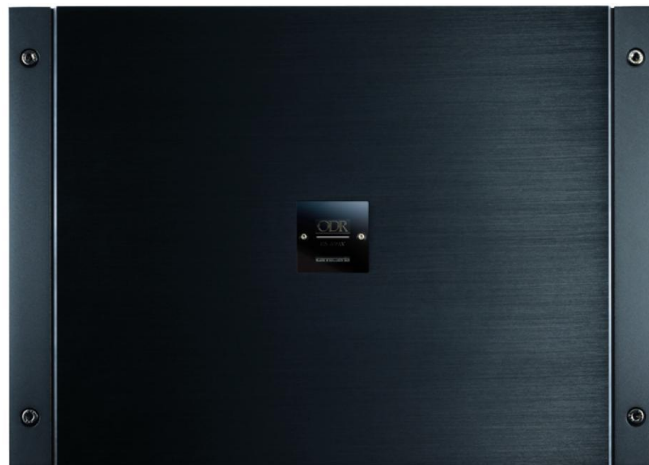


新型 カロツェリア X シリーズ 試聴レポート



5月23日、東京は江東区にある日本科学未来館にて行われました、カロツェリア X 新製品試聴会、いわゆる“カロツェリアロードショー”に行ってまいりました。その詳細をレポートいたします。

大きさに言わなければ伝わらない真実。

時折、私の文章は大きすぎるとお叱りを受ける事がある。思った事、感じた事をそのまま言葉にしようとするものだから、感動が深いほど大きさと取られても仕方のない表現になってしまう傾向があるのだろう。冷静に製品の良し悪しを判断し、出来るだけ中立的視野に立って述べようと努力しているつもりだが、過剰な表現があればお許しいただきたい。



デジタルプロセッサ RS-P99X

去る5月23日、東京にて行われた、全国縦断“カロツェリアロードショー”の開幕地、関東会場へと行って来た。実は6月20日には地元福岡での開催が予定されているのだが、それまでの1か月足らずが待ち切れなかった。このところ真新しい動きの無かったXシリーズにおける、待望の最新作である。1か月近くも待てるほど私は我慢強い人間ではなかったからだ。

ところで、今回フルモデルチェンジされたのはデジタルプロセッサのRS-P99XとアナログアンプのRS-A99Xである。旧モデル

のRS-P90XとRS-A70Xも、これ以上の改善点があるのかと思えるほどの優れた製品であったが、長らくモデルチェンジが無かったXシリーズにあって、今回の変更が単なる消費者の目先を変えて売上げを伸ばしたいだけのモデルチェンジで無い事を祈りながら、会場入りしたのだった。そうしてそこで耳にしたものは、これまでにない驚愕のサウンドであり、圧倒的な性能向上であった。いくら大きさに書かないようにと気を使ってみても、感じたままを書くとするならば、少々大きさにならざるを得ない。その事を先ずはご了承いただきたいと思う。



パワーアンプ RS-A99X

Xシリーズ新旧比較試聴、こりゃたまげた！

会場へ着くと、「なぜわざわざ九州から・・・」と驚く人たちとのあいさつもそこそこに、セミナー会場へと入った。そこはこのところパイオニアのセミナーではお目にかかることの多いAV評論家の長谷川教通先生による「音楽の楽しみ方セミナー」で、その中で、Xシリーズの新旧モデル比較試聴が行われた。

初めにXシリーズとは異なる、パイオニアの新開発、HVT方式のホーム用スピーカーの、試作品でのデモが行われ、その後新型PRSシリーズの3WAYスピーカーのデモンストレーションが行われたが、こちらは新型PRSスピーカーのレポートの方に書くこととする。



長谷川先生によるセミナー会場

いよいよ新型 X の登場である。

スピーカーは RS シリーズ 4WAY へと繋ぎ換えられ、はじめに旧型の RS-P90X と RS-A70X のコンビで試聴を開始した。曲はいきなりクラシック、ベートーヴェンのバイオリン協奏曲である。

旧型コンビも実に捨てがたい、魅力的なサウンドである。

思えば十数年前のカロツェリアブランドの音は、アキュレート（正確さ）ばかりを追い求めた、音は良いけど、どこか物足りないサウンドが主流を占めていたように思う。スタジオモニター至上主義とでも言おうか、同社の業務用ブランド“TAD”の成功が、音作りの方向性を他のジャンルへと波及させてしまっていたのかもしれない、それに比べると、旧型とはいえ、現在のカロツェリア X の音は何と魅力的だろう。“真実を再現”しようとするのではなく、“音楽家の芸術を再現”しようとしているのか。或いは“一流の音楽家による聴衆の感動”を再現しようとしているかのように感じる。そんな事を考えながら聴いていた。

次にいよいよ新型の登場である。プロセッサーとアンプが RS-P99X と RS-A99X へと繋ぎ換えられた。不思議な事に、長谷川先生の発言がやけに少ない。その理由はすぐに解明した。“聴けばわかる”レベルだったのである。解説は無用だったのだ。

曲は先ほどと同じベートーヴェンのバイオリン協奏曲。音が出た瞬間息をのんだ。音の空間がまるで違う。演奏者がその場にいるかのような明確な解像度を持っている。これほどの解像度はカーオーディオでは先ず聴いた事が無い。まるでハイエンドホームオーディオのようだ。オーケストラを包んだ空間の大きさが手に取るように分かる。楽器と楽器の間に、音が存在している。これだけの音場感を持ちながら、楽器の輪郭は極めて明瞭であり、バイオリン奏者の手の動きまで感じ取れるようだった。

ハッキリ言って旧型とは次元が違う。

私はオーディオ業界の人間であり、ショップオーナーである。お客様に本当に良いものを提供するためには、製品を見極める目は常に冷静でなければならない。高いだけでその価値もない製品をお勧めしたとあっては、お客様に対する背徳以外の何物でもない。従って私が試聴をするときは、ついつい、楽しむと言うよりも分析的な聴き方となってしまうがちである。しかしこのときは鳥肌が立った。新製品の試聴でこんなことは滅多にない。

次に聴いたのは女性ボーカル。ヒラリー・コールが歌うセクシーなナンバー“ザ・スネーク”である。実はこの曲は、昨年一年間、私がリファレンスとしていた曲であった。従って相当に聴き込んでいる。細部まで理解できているつもりであった。今度は初めに新型から聴いて次に旧型へ切り替えると言う、先ほどとは逆の順番で聴いたが、新型 X から音が出た途端、これまで聴き取れなかった音がいくつも確認できた。私が一年間聴き続けてきたのはいったい何だったのだろう。うちのホームのリファレンスでもここまでの音は出ていなかった。この曲は知り尽くしたつもりになっていたが、その自信は心地よく打ち壊さ

れたのであった。

旧型に繋ぎ換えると、今まで聴いてきた通りの音を感じ取り、なぜか懐かしい気持ちとなった。「こうこう、こうなんだよ、この CD の音は」と思っていた。自分の記憶にある音の印象が、一瞬にして過去の物となってしまった訳である。だから旧型を聴いた時、少し懐かしい気持ちとなったのだろう。新型はそれほどのインパクトを持っていた。

それからはフルートソロ、J-POP 系などを試聴したが、どれも結果は同じ。この違いは幼い子供でも判るレベルなのかもしれない。もうこれ以上良くなりようがないと思っていたものが、どうしてこれほどまでに進化することが出来るのだろう。

小型化は時代の流れか！？流行か！？それとも・・・・・・・・

デジタルプロセッサ、パワーアンプ共に、新型は旧型と比べ、目分量で 30%ほど小型化しているように見えた。これも時代の流れなのだろうか。

かつて巨大なハイパワーアンプが主流だったアメリカ市場でも、2~3 年前より小型のアンプが求められ、平均的には A4 サイズほどの物が主流となってきている。スペースユーティリティや居住性を犠牲にしてまでカーオーディオにのめり込むと言う行為は、もう過去の物となってしまったのかと思うと、古い人間としては一抹の寂しさを感じないでもない。

カロツェリア X も時代の流れには逆らえず、小型化の要求にこたえたのだろうか。小型化はパーツの大きさに制約を与え、基盤への実装化が避けられず、音質が向上することはあまりない。寧ろ劣化することの方が多い。実は私も、新型 X の写真を見ただけの段階では、そういう先入観を持っていた。ところがそうではなかったのである。

先ずプロセッサだが、これは小型化が前提にあったようだ。プロセッサのようなデジタル機器は、ノイズとの戦いである。電力は小さいとはいえ、アナログとは比較にならない 1 秒間に数十万回以上の ON,OFF 信号の連続である。これが電磁波となって飛び出せば、凶悪なノイズとなって自身の回路内に深刻

な悪影響を及ぼす。極端な場合、周辺にあるデジタル機器（車のコンピューター類など）への影響もありうるだろう。デジタル信号はデジタル機器内のデジタル回路部分に閉じ込めておく必要がある。長谷川先生の講演の中でも触れられていたのだが、一部の先駆的な技術者達の間では、デジタル機器を小型化することによって、



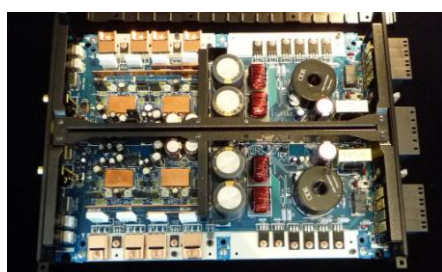
RS-P99X 4層基盤

そのノイズや複射が大幅に低減できるということが語られていると言う。デジタルプロセッサの小型化は、デジタルノイズの影響を最小限に収めるために必要なことだったのだ。その小型化を実現し、更に高音質化を両立させる技術として、今回の新型プロセッサに用いられたのが、通常よりも2倍ほど厚い銅箔を用いた4層基盤である。

基盤は通常 $35\mu\text{m}$ ほどの厚みで、これは普通の印刷用紙よりも薄い。従ってそれが持つ抵抗は思っている以上に大きい。RS-P99X に用いられた基盤の銅箔の厚みは $60\mu\text{m}$ から $70\mu\text{m}$ 。これは抵抗値が半分以下になる事を意味する。

小型化によるデジタルノイズの低減とそれを可能にする4層基盤。更に銅箔の厚みを2倍にする事により、たとえパーツが小型化し、基板実装となっても、そのデメリットを補っても遥かに余りある効果を実現することができたわけだ。

パワーアンプの高音質化は帰還回路のDC化が大きいと言われた。DC帰還（電流帰還）は比較的新しい技術である。これにより、レスポンスが良く、ワイドレンジで、低域から高域まで位相の乱れの無い出力信号が得られているのだそう。また、プロセッサでも採用された外層 $60\mu\text{m}$ / 内層 $70\mu\text{m}$ 銅箔厚4層基盤が採用され、小型化に貢献している。ではアンプでの小型化のメリットは何だったのか、開発者の説明によれば、小型化による温度の均一化が音質に大きく貢献しているらしい。



RS-A99X 内部

通常アンプは冷えている状態よりも温まった状態の方が音は良い。理由は様々だが、その一つとしてアンプ内部の素子（特に出力素子）の温度が不均一である事によって、抵抗値に差が出来、それが音質劣化へと繋がっている事があげられる。RS-A99X では出力素子を銅板で固定し（銅は温度の伝達スピードが速い）

素子同士をかなり近い位置にレイアウトすることにより温度の均一化を図っている。出力素子はアンプの中でも比較的大きなパーツである。これを近付けてレイアウトするのならば、その他の素子も間隔を縮めなければならない。つまりアンプの小型化は高音質化のための必然だったわけである。

新型のデジタルプロセッサとパワーアンプの小型化は、スペースユーティリティの向上や取り付け性の向上だけに留まらず、高音質化のためにも必要な事だったのだ。

もう一つ、大きな注目点として、RS-P99X と RS-A99X の間を繋ぐアナログ部分に、10Vのスーパーハイボルテージモードを用いた事だろう。

アナログ伝送部分（RCAプラグで繋ぐ部分）の最大電圧は、一般的なヘッドユニットで1V前後の物が最も多く、ハイボルテージと言われるものであっても4Vほどであった。それが10Vとは、いやはや、凄まじいスーパーハイボルテージだと言わざるを得ない。

実は我々インストーラーレベルに於いて、ヘッドユニットの出力電圧を上げ、ハイボルテージ伝送とする音質的メリットは、十数年前から経験則的に知られていた。ところが今日に至るまで、高い出力電圧を持つヘッドユニットほどのメーカーからも発売されておらず、

アンプにハイボルテージで信号を入力しようとするれば、別に信号ブースターを付けなければならなかった。しかしそれによる音質劣化を考慮すると、プラスマイナスゼロの感がぬぐえなかった。

なぜこれまでハイボルテージアウトプットが開発されなかったのかはよく分からない。もしかすると S/N の向上以外に大きなメリットはないと思われていたのかもしれない。しかしハイボルテージでアンプに伝送することによるメリットは S/N だけにとどまらず、低域の分解能や高音の重量感など、計算だけでは表せない音質上のメリットが、実聴上でははっきりと確認できていたわけである。

ともあれ、その効果によろやく気付いてくれたメーカーがパイオニアであり、それが最初に投入されたブランドが X シリーズであったことを大変うれしく思う。

今回の X シリーズの新製品は、噂の段階では単なる小型化だけだと思われていた節もあったが、実際に音を聴いてみると、旧型を遥かに凌駕する音質の向上が図れており、カーオーディオがハイエンドホームオーディオの独壇場だった領域にその一步をしるしたという記念碑的な感がある。

また機器の小型化は、車室内に於ける居住性の向上と取り付け性の向上のみならず、高音質化のためにも小型化の必要性があった事を教えられた。その事は今後のカーオーディオ製品全体に一つの方向性を指示したのではないかと思う。

今後新型 X シリーズを取り付けたスーパーハイエンドカーオーディオが、続々と世の中に登場する事を考えると、いちカーオーディオファンとしても楽しみでならない。

エモ親方

お客様へ、

エモーションでは、新型カロツェリア X シリーズの素晴らしさをより多くの方へお伝えすべく、6月下旬の発売と同時に店内デモを展開し、また7月4日には新旧比較試聴イベントを予定しております。更にその前には、カロツェリアロードショー2010 in 九州が、福岡市東区の“海の中道海浜公園ホテル”にて行われます。これは私が体験したものと全く同じ内容で行われるイベントです。より多くの皆様のご来場をお待ちしております。

また、新型 X シリーズの研究を続け、近いうちにとっておきのベストシステムを皆様にご披露させていただきます。お楽しみに。

参考 HP

http://pioneer.jp/carrozzeria/carrozzeria_x/rs-a99x/

http://pioneer.jp/carrozzeria/carrozzeria_x/rs-p99x/

http://pioneer.jp/carrozzeria/carrozzeria_x/lineup/rs-d7x3/

<http://pioneer.jp/carrozzeria/museum/roadshow2010/>

<http://pioneer.jp/carrozzeria/museum/roadshow2010/kyusyu.html>